



S.T. 600

vol.7

息

巻頭骨

04 三角みづ紀
訪客

寄稿

06 野村喜和夫
不意の白日

08 平川綾真智
響北みづさ

11 海埜今日子
存在のたえられない消しごむ

13 小笠原鳥類
地球のいろいろなハト、緑色

16 山田亮太 カニエ・ナハ 橘上
EPI VS JK

連載

38 河野聡子
ハンド

39 小田原のどか
むりえわ

ダンサーズっ

42 兼栴綾
順番と回転

43 疋田龍乃介
ハロー・オブ・ザ・ザ・リビング・デッド

46 金山大地
(続・二) 失題、即ち闘争マシーン漂流記

51 金子鉄夫
ノウのみち

54 鈴木一平
なんとなくやっちゃやうからな / 楽しい人

短歌

60 飯塚距離
おせっかいな雨に対して不満も少なくなない地べたたち

64 岩尾忍
真野さよ『枯草の手袋』より

67 山田亮太
平戸廉吉の機械の動物

ホネカイブっ

編集後記

72

卷頭骨

か ん と う こ っ

訪客

三角みづ紀

泣きわめく自分が伸びてゆけば
視界がひろがるものだった

大きな窓が

ひらかれながら待っている

形だけをのこす

軋む

揺れる

砕けてしまつて

名前が損なわれた

すみかはあれど

届かない手がおぼつかない

(遠きにありて思うもの…)

ホルマリン漬けの名前。

誰かが訪ねてきたら、わたしは不在と伝えて。
学習しないものであるから。

寄

カ

稿

コ

ウ

不意の白日

野村 喜和夫

とわ

の眠りのまえに

もう一度瞼がひらくように

なおそこがこの世の果ての

地と空のすきま

あるいは午後の脳の

奥の奥の暗がり

であろうと

瞼がひらくように

不意の

白日

のなかで

およそ考えられる

もつともしなやかな男女ふたりが

向かい合い

手をそよがせたり

足をまわしたり

静謐な

あまりにも静謐な

対話

α を描くように β を描くように γ を描くように

だがすぐに闇がふたりを

消してしまふ

それからまたうつすらと
ふたりであることの

漏出

とぎれとぎれの血の
せせらぎ

整骨

呼吸する薄明のなかで

音楽の絹

ふるえる人称の

翅

あるいは最後から二番目の陶醉

それからまた闇が

消炎剤のようにしみわたる

とりかかれ

私は私に蔽われた

紋様

その発掘に

葦北みつき

平川 綾真智

眉をしかめた溝にむらがる昨日は過熱し燃え尽きる

低くなる陽は電柱に座り帽子の余る目庇を焼いた

鼻の下が煎つてもらつてから来る

お豆の、とつても中挽きな

黒いに近いへ燃されると、すぐ

二つのしこりを塊を奇妙な形のままに下げる。

道の真ん中を歩いて帰った

未遂の卵と 暮らした日々は、おしまいだ。さあ
すつかりと。

パッケージがレジ袋を圧する 指輪といつしよにくい込んでつくる

缶は出してみてもタブは開けてみて虎縞ガードレールにめがけ

これまでの唾は吐くんだ、ぜんぶラックス

・コーヒーをすすつてみれば、

おくちににがい
にがくない

背すじが小規模に笑うんだ。かかった時間は大人の身体で

整う仕方のないことだ

電線が耳の穴を掘ってくる、いちじくの葉っぱを貼る場所が

、ある

沸かしすぎは味が落ちるよ火を止めて

移そう適温に下げよう。

低くわだかまる茂みの茎根が触手が虎の白色を残さず隠せば

みっさなんだ、すぐ

瓶牛乳をだ巻き込み、ロゴでつだ

まんべんつなく

皆伐の端へと転がしたのだ

っ

今朝から。毛深い夜でしかない。

くぼむ水溜まりに街景が降つたら舗道タイルを擦過してやる
まったく春宵な豪剛毛だ。

たくしあげた部屋着の裾から

小さな膝小僧がのぞく 逃れた腿に殴打の痕が、

紫にくすみまだ散っている。核果をひつつけた褐色の肌を

焙煎するのだ脱ぎあいみるのだ

フィルターで抽出していく血まみれの乳幼児を掬いあい

紡いだ名前が口をふさぐ。

銀指輪の漏れる砂糖へ みっさへ、私が混ざる隙間へ

熱する液状化が垂れた

両方のまぶたが目にかぶさった

厚く、

ひろげてゆつくり間を置く淹れる淡さに照らされる

。恋

は女子のキンタマです。

っ

きりひらかれた柔らかい斜面が湿気になだれかかる土質をひろげつなく足裏に
吸いついてくる脂指の股へ舌を入れてくる。

割れた一本道は長い

古砕アスファルトの合間に下生えが抱えた有機肥料の屑が臭くて

スチール缶は 濡れそぼる。夜は卓越する香気を、

肯定し合って、みっさと二人だ。

絶滅するだけの個人という種が胸元をくつろげて祝福になる

黄ばむ滑らかな歯並びをたどって達して肌に育み続けて、
去って行った、悲しい息づかいを
いちもつが救いあげていく。正座した陽光は電信柱の頭から
、落ちてもつれて

臓物を吐き群生に合板に蔓に血流を塗る。内側の

吐瀉物を尾根までつないで谷あいの向こうに夕沁みをつくる。

ひどく懐かしくてたどり着けなく

みっさの匂の一瞬の

いとなみはなすすべもなく吸い飲み続け、やがて我にかえるんだろうね。

醜悪な、えつちの片隅に人生を置く

ためらいだらけの身体にしがまれ、その時みっさは遂につようやく、

一緒に居ちやつた その事実、が

。最大の自傷だったと気付く

樹木の感覚が広くなり、去年からの殻下生えが苔に滑り 振り回したコンビニ袋の

こよりが、ゆで卵の殻を剥く。窓から

性器を出した、みっさは渋皮を裂き琥珀色に煮えこぼれているよ

着いたら つば帽子の身体滓から白牛乳を

噴射するんだ。果芯のぬたくり返しに蹴り上げられて叫んで腫らすよ つ

ぶら下がる交じる溶けている濁きは出来あがりなんだ。

混じり合うだろう、肉液カフェ・オ

・レ・コンバーナが、

あの部屋にせまい

せまくない

存在のたえられない消しごむ

海埜 今日子

という、しげみから、いしずえのような、かるさがつのつた
よふけのまにまに、きょうのけしごむ、いたいけなからだをこすれ
はがれてゆくきたいにみみをすます

うみかぜがおぼえをはこんでいる、すこしまつて

おさえていないとね、いつだったかのようにぎんこうを

おや、どうしたというのだろう

ふたごのほし

みつめているのは、べつじんのおもきだったのかもしれない

かおのないしようにたいがうなずき、きずのかしよだけうつつをぬかす

はんぶんはかこだったのかもしれないし

さんぶんのいちのはたしやのきおくだったのかもしれない

(だったら、とても、あなたをであうのに)

もう、いいかげん、おかえりよ

ないでいるので、じゅうりよくだったか、わずかにちぎれるのだという

ふたごだったら、いちべつをかわし、あとをおうでもなくって、みあげるの

おや、なら、とうにはじまっていた

という、あんてんから、いしずえのようなおもみがわれて

うしみつどぎ、ちいさなかせを、けてやれ、からだをまさぐれ

はいだのだったら、うではいるのか

うみをつたえるとおぼえが、ちかいきつもんをたばねていた

すこしだけ、いたい、から、わたしたちのあいだに

たおれるために、だったかもしれない、むごんなんかじゃ

きれつをひろげ、しよたいふめいをさらけだせば

おや、くらがりにぶんしのかずだけ、きえましたね

ふたごたち

みかけたのだと、よんぶんのいちが、しげみにむせぶ

えんびつのしんをけずりつつけ、わたしをどんなにかいていたのか

ひるのけしごむ、だったら、はらり、ぽろりとのこるだろうか

すこしまつて、かるさがどんどん、もう、たたくので

さらににぶんのいちがとほうにくれたのだと

おもいでのように、かいそうする、さくせいする

という、しげみをあらいだらいい、おもさにたばね、けはいよりもたましいとなれ

という、よぞらにとつて、ごうけいならば、わたしをはがす

けしごむだったら、あげましよう

ふたごぼし

たからかに、あいずをかわし、とおいきずをむせている

とでも、あなたをあいつした、かるさがうけとる、ぶんぼ、ほうつてね

えいえんのような、かぞくがとだえ、また、いつしゅん、さらそうとおもう

おや、やりなおせる、のかしら。かおのおわったきんこうです

うみかぜが、いしずえをなでるような、おもさがつのつた

よあけのまにまに、けしごむだったら、さくやをうて

(だったら、とても、あなたをむくちだ)

地球のいろいろなハト、緑色

小笠原鳥類

三省堂の『世界鳥名事典』でアオバト（ハト科）を調べると、「海水を飲む」生きているエビを食べるだろう、エビは半分が水で、考えている「海水を飲むという変わった習性をもつ。」（この事典からの引用をゴシック体にしよう、ではないか）歌う、海水は緑色で虹で、浮んでいる。エビがクネクネ踊って考えている曲線である。アオバトを漢字で書くと「緑鳩」で、緑色の鳥である緑色の魚である、緑色のエンゼルフィッシュのような熱帯魚の図鑑が透明な表紙のガラスだったという。エンゼルフィッシュは鳥のようにパタパタ飛ぶのだからけれども（水面の上）トビウオは世界鳥名事典に登場しない銀色だ、コンパクト・ディスクの、ような、ものである。透明な部分があつてヒレである。ヒレを食べると昆虫の味であると思いました。昆虫の翅は魚のヒレで、音楽である。

学研の『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』には、ナゲキバト（ハト科）という種類のハトがいて、「カタツムリなどを食べる。」（この図鑑からの引用もゴシック体にしよう。ではないか。ではないか）それは海水を飲むという変わった習性（音楽）ではないか、カタツムリは少し塩味で海水なのではないかと夢を想像するんだ、ヴァイオリン——どの楽器を選ぶか、オーケストラでどの椅子に座っているんだ。オーケストラで国語辞典を読む人を考える、今月（二〇一一年一二月）はいろいろな国語辞典が新しく発売されるだろうか。どれを買うか考える……三省堂の……学研の……辞典も……あつたか。椅子に座つて国語辞典を読む人は表紙を持っているのだ、表紙はゴムのような魚であつた。金色の、文字、あるかもしれない題名。というわけでナゲキバトについて少し調べようと（ポケット版の図鑑ではあまり説明がないので、）（それで、）楽譜……のように細かく印刷されてある、世界鳥名事典（三省堂）を見ると、アオバトは「アオーアオーアオーなど」が楽器であつたのだし（交響曲）、青い青いと言っている喋る言葉。ナゲキバトは「オーウ、クークークーと鳴き、その声はどこか寂しげなところからこの名がある。」ナゲキバトは青くなくて（暖かい灰色であるか）（雪）、それで青くない青くないと言っている木の上であるのだつたし、カタツムリ食べるカタツムリ食べるカタツムリ食べると言つたし録音もされていたんだし、このライブは録音されているんだロックである、「絶滅したりヨ」ウバトと見誤られることがある。」あッ昔の図鑑に細かいカラーの絵の細かい部分まで描かれた絵でリヨコウバトを

見たことがありましたよ、しかし……ナゲキバトだったのかもしれないし、眼鏡はヴァイオリンだったのかもしれないと言う。

ハト科の近くにはサケイ科がいました。サケイは学研のポケット図鑑によると「砂ばくなどにすみ」、「日本には迷って来ることがある。」ここではサボテンがイグアナを食べていた。サケイの「腹が黒い」という小さな四つの文字を記憶しておこう、ノートである。迷っている腹が黒い砂を落としているパラパラの鳥がいたらサケイであるのかもしれないしダチョウであるかもしれない、ダチョウは迷う迷うフラミンゴのようなものである。三省堂の——三省堂の世界鳥名事典でサケイを調べると調べると、「沙鷄」が映画の題名のように少しあるかもしれない、よう、な、漢字で書かれたサケイであった。サケイ科の鳥は「極端に短い足」それは宇宙から迷って来たのです。「形態は似ていないが、骨格や筋肉などはハト目に類似し、」光線を使って動いている走っている写真を見るとそれは馬のようだった。ハトは馬のようであるのかもしれない。ハトは、リスだ（映画で見た）。「針のように細長く」はサケイのいくつかの羽毛であるようで、サケイはとても細長い鳥ではない魚ではないミミズではない。「羽に水分を吸いこませて」水を、録音する。世界鳥名事典ではサケイの、黒い線で描かれた色のないイラストを見ることが出来る。絵はあまり多い本ではなくて、説明の文章を読みながらクネクネと想像する想像する、ハトに似てないようで骨格や筋肉がハトに似ている鳥をだ。ハトの筋肉は細いよ、雪の日でも公園にハトが多くてねえ、多くないかもしれないが、あれはドバトだね

「公園などで見かけるハトは、デンシヨバトとして使われていたものが、野生化してしまい、どんどんふえたものです。」

ドバトと呼ばれています。」（学研のポケット図鑑の鳥）

野生化することは、ライオンになることなんだな。アライグマになることかもしれない。アライグマは、カラスである。どんどん増えるものはネズミの背中だモコモコである。アメリカではたくさん映画が作られます（インドでも）。映画が増える。デンシヨバトは「カワラバトから作りだされました」カワラバト（ハト科）。全身白色のギンバトは「シラコバトから作りだされました」、おお、学研のポケット版の図鑑に書いてあった。「シラコバトは76ページに説明があります。」シラコバト（ハト科）。

同じポケット版の図鑑によると、ミカドバト（ハト科）は「顔や腹は灰色」「背や尾はこい緑色」三省堂の世界鳥名事典によると漢字で書くと帝鳩で、映画の題名のようにではない

か椅子に座って観る。椅子は赤い布で描かれていた。「**島々に分布。**」鳥が緑色のカメのよ
うな昆虫のような鳥の背中であったかもしれないという。「**和名と英名は体が大きく堂々と**
してゐるといふ。」十一メートルのヘビ。それからキジバト（ハト科）を見る。

TiP! vs JK

ROUND 1

シイノキヒナコ(三十二才・ダンサー)は、踊り場で踊る。

(現代アーティストの肖像シリーズその7)

【プロフィール】

シイノキヒナコ。一九七六年、神奈川県横浜市生まれ。ダンサー。K美術大学絵画学科油絵専攻(中退)。二十八才のある雨の日の信号待ちに突然踊りはじめて、以来数十回にわたりおもに都心のスクランブル交差点を舞台におこなわれた、車や歩行者のあいだを縫って踊るダンス作品で注目を集める、がこのパフォーマンスの際、突然右折した車に撥ねられて左足を骨折、しかし二ヶ月後には早くも松葉杖を巧みに使ったダンスでみごとカムバック、以後ひきずる左足を活かしつつ、郵便ポストのうえで踊る「ポスト・ダンス」シリーズ、石のしたでアリンコたちと踊る「石のしたでアリンコと踊る」シリーズ、等などつぎつぎとダンス作品を発表。

【現在の活動】

シイノキはいわゆる「舞台」(ホールや劇場)で踊るのが好きでなく、たとえばスクランブル交差点だったりポストのうえでったり石ころのしただったり、ときにはだれかの夢のなかだったり彼女の「舞台」で、そんな彼女の現在のお気に入りの舞台は「踊り場」である、踊り場といっても「踊るための場所」ではなく、「階段と階段のあいだにある平らな場所」のほうの踊り場。

「階段と階段のあいだ、というのがポイントなんです」と彼女はインタビューで語っているが、それがなぜポイントなのかまでは語っていない、それは彼女のしんたいが語ることなので、わたしたちは彼女がじっさいに踊るのを見たり聞いたりすればよい。

そんなわけで目下、彼女は踊り場で踊っている、どこかの団地や高層マンションの、あるいはホテルや廃病院の、特徴的なあるいはとりたてて特徴のない、踊り場で彼女は気が向くとおもむろに踊り出す、たまたまそこを通りかかるひとのたいていは迷惑そうに顔をしかめて彼女のわきを黙ってとおりすぎていき、なかには怒り出して彼女をドナリつけるひともいるけど、そんなとき彼女は「踊り場で踊ってなにがわるい！」ともの凄いケンマクでやりかえす。

なかには(それは子どもと老人が多いのだけど)、いっしょに踊り出すひともいて、それからもちろん幽霊と踊ったりもする、幽霊たちはたいてい踊り場にたむろしているので(でなかったらパチンコ店かゲームセンターかカラオケ)、彼女はひまをもてあました幽霊たち(それもやはり子どもと老人の幽霊が多いのだけど)をさそっていっしょに踊り場で踊る、幽霊というのはつまるところ水分だから、踊って汗をかいてしまうと消滅してしまう、そうして踊り場の床もしくは踊り場の壁もしくは踊り場の天井のシミとなる、彼女はそれらの踊り場の幽霊たちのシミを記念するために写真におさめており、いまや数百点にもものぼるそれら踊り場のかつて幽霊だったシミを写した写真をまとめて、写真集を出版するにあたり、同シリーズによる写真展を近々開催する予定なのだけど、どうせならやはりどこかの踊り場で、ということで目下その場所を探してるところ。

七色のバカへ

七色のバカ

元気？

僕は元気だよ。

バカなんだってね。大変だね。

でも七色だからいいじゃん。

色彩

愛しています。鳥が鳴きました。卵を産んでいたのでしょうか。高いほうへ走っていったから、足首が冷たく痛んでそれ以上歩くことができない。ここでとどまります。自転車に乗って、会いに来てください。すぐそばまで猫たちが来ています。動くもの、生きているものたちが順に姿を変えます。手紙を読みました。震える目で何度も読みました。川辺でこれを書いています。そう書かれたところを何度も読みました。愛しています。生きていたいから、生きることにした、安らかな決意についてゆきます。枝が折られ、折られた枝をもって歩いた道にたくさんの、たくさんの歯が落ちていたので、もちつづけていたものと交換しました。ガバタン。そのような名の楽器が描かれた絵がありました。あったような気がします。絵のなかから嘆きや交換の衝動があふれて、手紙を書いています。愛しています。二度名を呼び、一度だけ振り向いて、それから振り返って歩いていった、その姿の後ろに、いたのですよ。愛しています。とても高いところにいた。いいえ、自転車は倒され、砂利に、砂利に、血がついていた。覚えていますか。見ないふりをして、石に傷をつけた。色彩。そう書かれていました。三度、それとも四度、破滅したようなそぶりで通り抜けて、坂道を歩いてゆきました。唇に糊がついています。開こうとして、開けなくて、釘で裂きました。その釘で、目の前で、奥歯をえぐりたい。歯が脱落してゆく。夢のような話ですね。前歯から順に歯が溶けていって、あごが変形し、奥歯だけを残して、目を覚ます。愛しています。雪が降れば、雪だるまをつくって、その上に座って待っているつもりでした。雨になりました。とてもあたたかい雨でした。どうしていますか。庭に埋めた金色の魚はどうなりましたか。昨夜、地中から立ち昇る火花を見ました。動いているもの、生きているものはそんな風に生まれ変わるのでね。愛しています。タイヤの音がなって、それから鈍い音がなって、いいえそんな音はならなかったかもしれない。鈍い何か在那里で生まれ、動くもの、生きているものが土の中にもぐりました。とめることなんてできませんでした。直線が曲線と交わり斜面と斜面が接続する場所に、これまでに何度も、とどまるものがありました。星がきれいですね。星が見えます。星が見える。そのことをどうして。星がきれいです。すりかえることが規則なのか。答えられますか。答えてくれますか。愛しています。答えてください。七つの電車に乗って、初めて見るたくさんの駅の名前を覚えました。たどりついて、すべて忘れました。どこへ行っていたのですか。愛しています。お母さんたちは探していました。泣いていました。誰にも言うことはできませんでした。ひどいやり方で、見知らぬ人を傷つけて、見知らぬ人ではなくなりました。星はきれいですね。愛しています。ここでとどまります。夜明けごろに家のまわりを歩いていたらころびました。踏み固められた雪が復讐したのかもしれませんが。隣でいぬがころびました。いぬもころぶのですね。一度ころんだいぬは二度と立ち上がることができません。その場に座りこんで雪に溶けるのです。唯一のいぬへの復讐。いぬを連れた少年はカスタネットを叩きました。何度もカスタネットは叩かれました。愛しています。彼が目を目を覚まし

たら、教えてください。愛しています。かすれた声で、注意深く、何かに復讐するように、かすれた声で、言いました。指先に汗をかいていました。鉄でできたボタンが冷たくて、引き返すこともできなくて、すべての電灯を消しました。暗くなって、誰も何も見えなくなればいい。足音や息遣いや衣擦れに耳を澄まし、耳は澄まされ、復讐するつぶやきが聞こえる。愛しています。そう言っていたのだと思います。愛しています。そう言いました。愛しています。愛しています。確かにそう言いました。髪の毛に砂がついていました。髪の毛に触れました。砂は落ち、動くものが流れました。蟻。蟻だったのだと思います。蟻を火で焼きました。火で蟻を焼いていました。植物の名前を口にしたい。そこにある植物のどんな名前も知りませんでした。何を見て、何を口にするのかが知りたかった。蟻が焼かれました。愛しています。星がきれいですね。石に傷をつけておきます。見えますか。星で絵を描いています。ガバタバ。愛しています。ここにとどまります。

*シイノキヒナコ

ダンサーの話だから自然と「踊り場」は「舞台」のことだろうなって思っていた。だから「階段と階段のあいだにある平らな場所」というのを読んで、はっとした。ぜんぜん階段の踊り場のことを考えてなかったから。そういえばなんであのスペースって、踊り場なんだろう……。 「踊り場で踊ってなにがわるい！」は屁理屈っぽくて面白かった。

*七色のバカへ

軽いけどよくわかんなかった。

七色って聞いて虹を連想したけど。

*色彩

「愛しています。」が所々入ってて、最初は優しい言葉だなんて思ったけど、だんだん冷たいかんじがしてきた。感情がこもってなくて、全体的に青っぽい、冷たいかんじがした。独りぼっちなかんじもした。

ROUND 2

赤

愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。鳥が鳴きました(卵を産んでいたのでしょうか)。高いほうへ走っていったから、足首が冷たく痛んでそれ以上歩くことができない(そこにとどまりなさい)。自転車に乗って、会いに来てください(会いに来てください)。すぐそばまで猫が来ています(別の猫も来ています)。動くもの、生きているものが姿を変えます(別の生きているものも)。手紙を読みました(手紙を書きました)。震える目で何度も読みました(何度か書きました)。川辺でこれを書いています(書きました)。そう書かれたところを何度も読みました(一度だけ書きました)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。生きていたいから、生きることにした、安らかな決意についてゆきます(枝を折りました)。折られた枝をもって歩いた道にたくさんの、たくさんの歯が落ちていたので、もちつづけていたものと交換しました(なぜ?)。ガバタババン(そのような名の楽器が描かれた絵がありました)。絵のなかから嘆きや交換の衝動があふれて、手紙を書いています(あったような気がします)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。二度名を呼び、一度だけ振り向いて、それから振り返って歩いていった、その姿の後ろに、いたのですよ(知っています)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。とても高いところにいた(いいえ、いませんでした)。自転車は倒され、砂利に、砂利に、血がついていた(赤かった)。覚えていますか(見ないふりをしました)。石に傷をつけた(何を?)。赤(青)。そう書かれていました(文字を)。三度、それとも四度、破滅したようなそぶりで通り抜けて、坂道を歩いてゆきました(一度は走っていた)。唇に糊がついています(海苔がついています)。開こうとして、釘で裂きました(開けませんでした)。その釘で、目の前で、奥歯をえぐりたい(やめてください)。歯が脱落してゆく(夢のような話ですね)。前歯から順に歯が溶けていって、あごが変形し、奥歯だけを残して、目を覚ます(目を覚まさない)。愛してます。愛しています。愛しています。愛しています。雪が降れば、雪の上に座って待っているつもりでした(雪だるまをつくろう)。雨になりました(とてもあたたかい雨でした)。どうしていますか(庭に埋めた金色の魚はどうになりましたか)。昨夜、地中から立ち昇る火花を見ました(見ませんでした)。動いているもの、生きているものはそんな風に生まれ変わるのでですね(どんな風に?)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。タイヤの音になって、それから鈍い音になりました(いいえそんな音はならなかったかもしれない)。鈍い何かがそこで生まれ、動くもの、生きているものが土の中にもぐりました(とめることはできませんでした)。直線が曲線と交わり斜面と斜面が接続する場所に、これまでに何度も、とどまるものがありました(とどまりなさい)。星がきれいですね(星が見えます)。星が見える(そのことをどうして)。星がきれいです(すりかえることが規則なのか)。答えられますか(答えてくれますか)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。答えてください(答えなさい)。七つの電車に乗って、初めて見るたくさんの駅の

名前を覚えました(たどりついて、すべて忘れました)。どこへ行っていたのですか(どこかへ)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。お母さんたちは探していました(泣いていました)。誰にも言うことはできませんでした(言えばよかったのに)。ひどいやり方で、見知らぬ人を傷つけて、見知らぬ人ではなくなりました(星が見えます)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。ここでとどまります(ここにとどまりなさい)。夜明けごろに家のまわりを歩いていたらころびました(踏み固められた雪が復讐したのかもしれない)。隣でいぬがころびました(いぬもころぶのですね)。一度ころんだいぬは二度と立ち上がることができません(その場に座りこんで雪に溶けるのです)。唯一の復讐(いぬへの復讐)。いぬを連れた少年はカスタネットを叩きました(何度もカスタネットは叩かれました)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。彼が目覚めたら、教えてください(教えましょう)。愛しています。愛しています。愛しています。愛しています。かすれた声で、注意深く、何かに復讐するように、かすれた声で、言いました(指先に汗をかいていました)。鉄でできたボタンが冷たくて、引き返すこともできなくて、すべての電灯を消しました(暗くなって、誰も何も見えなくなればいい)。足音や息遣いや衣擦れに耳を澄まし、耳は澄まされ、復讐するつぶやきが聞こえる(愛しています)。愛しています(愛しています)。そう言っていたのだと思います(愛しています)。そう言いました(愛しています)。愛しています(愛しています)。確かにそう言いました(髪の毛に砂がついていました)。髪の毛に触れました(砂は落ち、動くものが流れました)。蟻(蟻だったのだと思います)。蟻を火で焼きました(火で蟻を焼いていました)。植物の名前を口にしたい(そこにある植物のどんな名前も知りませんでした)。何を見て、何を口にするのかが知りたかった(蟻が焼かれました)。愛しています(愛しています)。星がきれいですね(石に傷をつけておきます)。見えますか(星で絵を描いています)。ガバタバ(愛しています)。ここにとどまります(ここにとどまりなさい)。

シイノキヒナコ(三十二才・ダンサー)は、踊り場で踊る。

(現代アーティストの肖像シリーズその7)

【最近気になっていること】

「先日ふと、そういえば踊り場ってなんで踊り場っていうんだらうってふと、疑問におもって、ネットで調べたら、「踊り場駅」っていう駅が横浜のほうにあるのがわかって、さっそく行ってきました。踊り場駅の周辺には踊り場郵便局も、踊り場公園も、ヤマダ電機踊り場店もあって、郵便局員さんが踊っていた、年賀ハガキが踊っていた、すべり台がすべりながら踊っていた、ジャングルジムがじゃんぐるじむをくるしむように踊っていた。ヤマダ電機踊り場店では液晶TVの前で猫がマタタビに酔って踊っていた。そのかたわらでガバダバン(エレキガバダバン!)を弾いているべつの七色の猫がいた。そのかたわらでべつの七色の電機猫(エレキネコ!)がべつのヤマダ電機を調律しているそのかたわらで、私も踊った七色で。そうして私たちはヤマダ電機踊り場店の店員さんやお客さんにバカと呼ばれた。ガバダバンと呼ばれた。バカと呼ばれたガバダバンだった。元気? はい。私は元気です。いいえ。私は楽器です。七色だから許せよ。踊り場で踊ってなにがわるい。こんどはいっしょに踊りませんか。愛しています。二〇一一年十二月某日、シイノキヒナコ。」

七色のバカよ

七色のバカ。

奴はバカなりにいろいろです。まず最初に言っておかなければならないことは、奴がバカだということですよ。もうこれは大変なことですよ。そうなんです。バカなんです。バカバカって一言でいうけど、もうバカなんです、何と言おうと。言わずもがなにバカなのに、何故改めてバカと言わねばならないのか。考えてごらん下さい。ただそこにバカがいる。それだけでもう全てじゃないですか。そこに「バカ」という言葉が入り込む隙間はありませんよ。バカに対してバカということほどバカバカしいことはありません。あなた、眼の前に自転車と生ゴミがおいてあったって、いちいち「自転車と生ゴミだ」なんて言わないでしょう？ その言葉に何一つ誤りはありません。しかし、間違いがなにひとつもないことをわざわざ言うことに何の意味があるのでしょうか？ そうでなければ我々は呼吸する度に、「今、窒素 78.08%、酸素 20.95%、アルゴン 0.93%、二酸化炭素 0.034%、ネオン 0.0018%、ヘリウム 0.00052%の空気を吸って、吐いたよ」と言わなければなりません。バカの前では言葉は無力なんです。さらに言えば、バカはバカにもできません。だってもうバカなんですもの。この事実を前にしても、まだ言葉を失うことができないわが身を呪いたくもなりませんよ。しかし、話はここでは終わります。何せあいつは七色のバカ。バカなだけではありません。もうどうしようもない。バカの上にさらに七色。それを肯定的にとらえるものもいるだろうが、生憎私はそう捉えない。七色。三色ではない。七色なんです。三色であればまだ許せます。しかし言うに事欠いて七色である。何故五色ではいけないのか。戯言はよしまえ。いつそ二四色にでもなればあきらめがついたものを。ただでさえ七色なのにその上バカ。救いようがない。バカな上に七色なのか。七色の上にバカなのか。そんなことはどうだつていいのだ。もつと言え、七色のバカなんてどうだつていいのだ。七色のバカだと？ バカも休み休み言え！ そんなことより政治の話をしようじゃないか。君は左翼かい？ 右翼かい？ もし左翼というのなら、君は太陽と海の左翼かい？

*赤

括弧の中が説明だったり問いかけだったりして、にぎやかなかんじがする。会話のようにも見えるけど、でもどこか寂しいかんじは残ってるように見えた。括弧はあとから付け足したかんじがして、括弧のついていない幻想的な文章よりも、現実っぽくて人間らしいと思った。血の真っ赤な色や、赤黒い色もあったけど、全体が淡い赤色？のように温かさがあった。題名の『赤』で、いろんな赤をイメージした。

*シイノキヒナコ

文章が七色になっていたり、「ガバダバン」「愛しています」が使われていることで、他の2つの詞が、全く関係のないものでなく繋がりを持っているように感じられた。

関係ないかもしれないけど、色が違うだけで、文章の雰囲気も違って見えた。とくに紫色の部分は、他より静かに見える。

3つの詞は「色」という共通点があることに、この詞を読んで気づいた。

*七色のバカよ

「バカの前では言葉は無力」とあるように、読んでいるうちにバカというものが、とても強いものに思えてきた。なんか、本物のバカにはなにやってもかなわないんだなってかんじ。

その上七色というのがおもしろいと思った。三色でも二四色でもなく、七色だからこそ、その存在がはっきりして見えて、強いものに思えた。

ROUND 3

ナナイロノバカデス

ナナイロデ、ボクハナナイロデ、ミダリニイキル、ナナイロノ、マルデボクハナナイロデ、アルイハボクハナナイロデ、ダイブアナタトチガツテイル ナナイロデナイボクデアツテモ、ドウシテボクハナナイロデ、ソレハソレデイキラスル ミズラクダサイ

セツチャクザイデツクラレタホウ、ナナイロデアルトヤクソクサレ、イレヂエガウカブ、ユウグレノ、アオイサツイデテヲニギル、バカバカシクトモカナシケレ、ナナイロデシカナイナナイロノ、ナナイロフゼイノコノボクデス

ミズラクダサイ ミズラクダサイ ミズノシロイトウメイニ クロイナナイロヲトカシテハヒソカニヒカルナナイロガ ソノナナイロノアカデイウ

「ニジラクダサイ、ニジヲアゲマス、ソウデス、ソウデハナインデス」

ナナイロデナイボクナラバ チガツタフウニミエタノニ アワレナリ アワレナリ ナナイロノボクヨ アワレナリ アワレナリ ナナイロヨ ボクヨ

ナナイロガボクデス、ナナイロガボクデス、ナナイロガボクデス、ナナガ、イロガ、ボクガ、デスデスカラ、デアツテ、デアリマセン

フタリノリスルジテンシヤノ、コウブザセキデジュウヲミステテ、イノル、ソノテノナカニフルエテミセル、オドリ、アリフレタナナイロノイチページ、マナブ、カメラノヒカリニテラサレル、サワル、ソノヒトイロデヌスマレル、アア、ボクハナナイロデス、ナナイロデス、ナナイロデスカラ、ヤルノデス、ソウ、アナタガイウマエニ、マア、バカノヤルコトデス、バカナンデス、ナナイロデス、ミズラクダサイ、バカナンデス、ニジラクダサイ、ボクナンデス、ヤメテクダサイ、マナブンデス、ネガウノダケレド、ニジナンデス

ミズラクダサイ、ニジラクダサイ、ボクラクダサイ、ナナラクダサイ、イロラクダサイ、イシツエトナル、イシツエトナル、イシツエトナリ、イシツエトナル、ソウデス、タイヨウガアカイカラ、ボクハ、バカデ、ナナイロデス ナナイロデスカ、ナナイロデス、ソノヨウデアリ、ソノヨウデナク、ソノヨウデアレ、ソノヨウデアル

モウカラダモナイノデス、ヤミニカラダガアルノデス、ムヤミニカラダガアルノデス、ヤミニカラダガナイノデス、ヤミガボクヲノムノデス、ボクノカラダヲノムノデス、ナイノニボクヲノムノデス、ヤミナドナイノニノムノデス、ボクナドナイノニノムノデス、ノマレタボクハバカナノデス ノンダヤミハバカナノデス ダレモバカデハナイノデス ドコニモバカハイナイノデス ボクハナナイロノバカナノデス

卒業

愛して、愛して、愛して、愛していて、鳥が鳴いて、卵を産んで、走って行って、足首が冷たくて、痛くて、歩けない、そこに、とどまって、自転車に乗って、会いに来て、会いに来て、すぐそばまで、猫が来て、別の猫も来て、動くもの、生きているもの、姿を変えて、別の生きているもの、手紙を読んで、手紙を書いて、震えて、目で読んで、何度も読んで、何度か書いて、川辺で、これを書いて、書いて、そう書いて、何度も読んで、一度だけ書いて、愛して、愛して、愛して、愛していて、生きていて、生きて、安らかに、決意を！ついて行って、枝を折って、枝は折れて、枝をもって、歩いた、道！たくさんの、たくさんの、歯が落ちて、もちつづけて、交換して、なぜ？ガバタバ！そんな名前、楽器！描かれて、絵があって、絵のなかから、嘆き！交換！衝動！あふれて、手紙を書いて、あった！気がする！愛して、愛して、愛して、愛していて、二回、名前を呼んで、一回だけ、振り向いて、それから振り返って、歩いて行って、その姿！後ろにいて、知っていて、愛して、愛して、愛して、愛していて、とても高いところのいて、いなくて、自転車は倒され、砂利！砂利！血！赤くて、覚えていて、見ないふりをして、石に傷をつけて、何を？赤！青！そう書いて、文字を！三回！それとも四回！破滅！通り抜けて、坂道を歩いて、一度は走って、唇！開こうとして、釘で裂いて、開けなくて、釘！目の前！奥歯！えぐって、やめて、歯！夢をみて、話して、前歯！歯！溶けて、あご！奥歯！残して、目を覚まして、目を覚まして、愛して、愛して、愛して、愛していて、雪が降って、雪の上！座って、待っていて、雪だるまをつくって、雨になって、あたたかくて、雨で、どうして、庭に埋めて、金色の魚！どうなって、夜！地中！立ち昇る火花！見て、見なくて、動いているもの、生きているもの、生まれ変わって、どんな風に？愛して、愛して、愛して、愛していて、タイヤの音になって、鈍い音になって、ならなくて、鈍い何か！そこで生まれ、動くもの、生きているもの、土の中！もぐって、とまらない！直線！曲線！交わって、斜面！斜面！これまでに何度も、とどまって、とどまって、星がきれいで、星が見えて、星が見えて、どうして、星がきれい、すりかえて、規則！答えて、答えて、愛して、愛して、愛して、愛していて、答えて、答えて、七つの電車！乗って、初めて見て、たくさんの駅！名前を覚えて、たどりついて、忘れて、どこへ、行って、どこかへ、愛して、愛して、愛して、愛していて、お母さんたちは探して、泣いて、言っ、できなくて、言えよよかったのに、ひどいやり方で、見知らぬ人！傷つけて、見知らぬ人！なくなって、星が見えて、愛して、愛して、愛して、愛していて、ここでとどまって、そこにとどまって、夜明け！家！歩いて、ころんで、踏み固めて、雪！復讐！いぬがころんで、いぬもころんで、立ち上がらなくて、座りこんで、雪に溶けて、唯一の復讐！いぬへの復讐！いぬを連れた少年！カスタネットを叩いて、カスタネットは叩かれて、愛して、愛して、愛して、愛していて、目を覚まして、教えて、教えて、愛して、愛して、愛して、愛していて、かすれて、声！注意深く！復讐！かすれて、声！言っ、指先に汗をかいて、ボタンが冷たくて、引き返して、できなくて、電灯を消して、暗くなって、何も見えなくなって、足音！

息遣い！衣擦れ！耳を澄まして、耳は澄まされて、復讐！つぶやいて、聞こえて、愛していて、愛して、愛していて、言って、思って、愛していて、そう
言って、愛していて、愛して、愛していて、確かにそう言って、髪の毛！砂！髪の毛！触れて、砂は落ちて、動くもの、流れて、蟻！蟻だった！蟻！火で焼
いて、火！蟻！焼いて、名前を口にして、そこにある、植物！どんな名前も知らなくて、何を見て、何を口にするのか、知りたかった！蟻！焼かれて、愛
して、愛していて、星がきれい、石に傷をつけて、見えて、星で絵を描いて、ガバタバ！愛していて、ここにとどまって、ここにとどまって！

アルゴン 他二篇

シイノキヒナコ

(踊りのためのメモとしての——)

アルゴン

身体はやかましい夜明の柩。
私からぬけだしたわたしのからだだが
窓辺から心臓までを疾駆していく七色の
——燃えている、あれは自転車です。

ネオン

言葉は無重力。
太陽のものがれた左腕が
その放射熱を二十四色に描いている
螺旋階段。
歯のないわたしは
あらゆる植物を
黙秘する。

ヘリウム

空気を吸っては吐く
という踊り
わが身を呪ういぬが転倒して
二度とおきあがることができない
という踊り
手紙を読み書きするという踊り
の練習で一日は終わる。
頭上をことばが卵を産む五色の鳥になる。

*橋上「七色のバカよ。」、山田亮太「赤」より引用・参照箇所あり

* ナナイロノバカデス

カタカナで逆に色がないかんじがした。全部がカタカナで均等に並んでいる中に、「アオイサツイデテヲニギル」とあって、青というめだった色があるのに、静かで潜んでいた感じが逆に怖いと思った。

「ミズノシロイトウメイ」に対する「クロイナナイロ」それを「トカス」という表現が、絵の具のバケツみたいに汚いものをイメージさせた。

白い透明と黒い七色、白いと透明は繋がりがある気がするが、黒と七色を繋げたのが意外だったけど、この詩では七色はぐちゃぐちゃで汚いイメージだったので、あまり違和感はなかった。

普段は七色といえば虹、というように連想するけど、虹ではなく、七色がまざった色のことを考えたのは初めてだった。

* 卒業

「、」が「！」になって、焦っていて忙しい文章に感じた。

急かしているような、要求しているようなかんじ。

でも「愛して、愛して、愛していて、」はそのままずっと「、」だったから、丁寧で、そこだけゆっくりしているように思った。

これが「愛して！愛して！愛していて！」だったら一方的なのに、そうじゃないのが、優しい表現だと思った。

* アルゴン

アルゴンは、「私からぬけだしたわたしのからだ」というところが、私とわたしのからだは別々になっていて、夢をみているときのように、ばらばらでふわふわしているかんじがした。

ネオンでは、「あらゆる植物を黙秘する」というのが、きれいな表現だと思った。喋らないはずの植物は、じつはいろんなことを話しかけてきていて、でも私はそれに答えようとしない。みたいなかんじ。その黙秘という表現がいいと思った。

ヘリウムでは、生活すべてが踊り。1日は踊りの練習。踊りというのは、生きることなのかな、と思った。

三つは空気の構成元素のうちの一つでもあって、空気は曖昧なかんじがするけど、それぞれの元素はしっかりあるところも、踊りと生きることにつながる気がした。

生きるとは曖昧なかんじだけど、そのなかの踊ることは確実なこと、みたいなかんじ

TiP! vs JK

ROUND 1

「シイノキヒナコ(三十二才・ダンサー)は、踊り場で踊る。」カニエ・ナハ

「七色のバカへ」橘上

「色彩」山田亮太

コメント=JK

ROUND 2

「赤」山田亮太

「シイノキヒナコ(三十二才・ダンサー)は、踊り場で踊る。」カニエ・ナハ

「七色のバカよ」橘上

コメント=JK

ROUND 3

「ナナイロノバカデス」橘上

「卒業」山田亮太

「アルゴン他二篇」カニエ・ナハ

コメント=JK

Written by TiP! (Jo Tachibana , Ryouta Yamada , Naha Kanie) & JK

Artworks by Naha Kanie

Special Thanks to S.H. & S.I.

れ
ん
さ
い

連載

庭に自分の名まえがつけられた木があった
それとも木の名まえが自分の名まえだったのだろうか
影のように息をして

だまつてみずからをつくつて
たまにくたびれた

ぼくたちの夕暮れのと雨が降る
世界はみかんの木である

枝に実るみかんひとつひとつが宇宙である
かつて大きな手がこれらの宇宙の外皮から
ありとあらゆる生き物を形づくつた

果汁は雨となってふりそそぎ
落ちた種から時間が生じた

雨がおちる場所で
けつして錆びない大きな手が
ぼんやりしている

行くの、ときいたら
行くよ、とこたえた

どこに、ときいてから
何色なの、ときき

もつとたくさんのことをきいた
右と左はどちらが好きか
好きな時間はいつか

どんな音が聴こえるか。
大きな手が、

いたいおまえは何を知りたいの、と
髪の毛をくしゃくしゃにしたら
真理だら

べつと声がこたえた、からかうように
だからムツとして走つたのだ
世界もひとつの宇宙であり

収穫のときを待っている
固い皮に包まれて守られているが
時は追つて

この世界の外皮を剥こうとしているのは
もつと大きな手
大きな大きな手だ

ねえ
ききたいことはたくさんあるから
こたえてくれないだろうか

どこへ行きたかった？
どんな足をしてた？
走つたのはいつ？

どのくらいの高さで？
カステネットを持つのはどちら？
はじめて見たものは何？

どこにいたの？
どこから来るの？
目のまえにいる人が好き？

信じているものは？
やりのこしていることは何？
死んだらどうなるの？

どうして生まれてきたの？
誰をえらぶの？
あなたは誰？

水はかすかにみかんの香りがする
小さくてきらきらしてうごくものだ

ダンサーズっ

順番と回転

兼樹 綾

君と寿司屋でデートがしたい
死んだ魚が開かれて
回ってくるのを二人で見たい
シベリア のような 寒さの中で
手を握りたいし くちづけしたい
回転寿司屋で待ち合わせたい
百年待たずにみんな死ぬ
そんな話を並んでほしい
いつも親しい人々の
噂する私達でも

ボックス席は家族めいて
夫婦／老夫婦／幼児
かろうじて私と君 他人同士で今のうちに
カウンターから「納豆巻きをお願いします」

有益なコンベアの回転
高速の周回にはじかれて
百年たっても死ねずにいたら？
私は誰とも分からずに

(くちづけする) 誰だったっけ
誰だ この部位は 尾だ
(好きだったはずだ)！！
数十億回くり返した
好きだった の複数
開かれて回ってくるのを
新しい君と眺めるつもりだ
海老卵胡瓜の原色
百二十円の回転の連続

ハロー・オブ・ザ・リビング・デッド

疋田 龍乃介

とろける午睡から
菊の肌を折りたたんで
そうやって吹かれて
左右に滑り始めて
墓石の段差を
丹念に濡らしてまわり
泥の真空を直腸から
倍音をくねらせながら
なめらかにはがしても
姿をあらわに導きながら
こないだ生まれた婆や
歓迎の燭台焰を横流して
墓の下からわんばんこんわわあ
溢れるハローは根付きながら逆立ち
こん、ちわちわ

ちっわ

んちっわーん

昨日でできた階段ではたしか昨日挨拶を交していたはずの人たちがいぎ近づいてみると全身にのっぴき
ならない塩水をおびていて驚愕させられるという言伝がある街のはずれの箱庭でも覗かれているのがた
とえお昼であろうとも私は最低でも会釈だけは欠かさないだろう【しなればのぼらなければ
ならない】階段から降りる奴らは静かに告げる、ハロー、ハロー、ハロー、ハロー、ハロー、ハロー、

腐肉や汚眼を
菊の支管の底に丸めて
もちろん輪状だから
垂れ流す
そこは垂れ流されていく
生きとし生けるものたちが言うより先
壊滅して出生そして
ハローから弛緩する夜の

庭園に備え付けられた血糊
植物性物質が強石の細魚のようだ
芳醇な消臭ガスに覆われ溶けていく、
つい足を押し込んだ堀の輪へ
肉の土が固まって
できた薄羽の艶を愛撫する
安心しろ、
合い間すらすでに肌だ
んっちわー、で、沸いた
はずのお風呂から
次から次にりびんぐでつど

居並ぶ牛乳瓶の腐敗に合わせて
踊りながら死者と生者がとびかわる
投げつけてくる
すごい澆刺な奴ら
まるで相当数の速球だ
描きかけのブラインドなら
得意気に受け流して
冥福を思うだろう
垣間見られる燭台から
薄蟬の滲み模様を成して
箱庭の壁を担い、
ずれ影に隠れる私たちの光、
翡翠の枠に水が肥え、
甦るよ、わんばんこんばんわ
友達の浮き輪に乗って、
安心しろ、
にちっわー、
すらすでにハローだ
ハロー、思ったより死者でした
むき出しで青紫の爺さんから
生まれてすぐ死んでまた

すぐ生まれてきた柔らかい赤子まで
みんな違ってみんななくさい

ふと強烈な口臭がこだまして

とろけるような午睡から

注視したらほら

そこ完全に腐ってるよ

つむじから爪先までが涅槃ハロー

螺旋状の訃報が雷面をただよい

誕生する輪廻は静かにお悔やんで

食い止められない満開と

二段飛ばしの上り下り

死者から死者から死者からハローハロー

ハロー、ハロー、ハロー、ハロー、ハロー、ハロー、

和尚は骨の髄に物議をかもすだろう

生きとし生きるものの声がさむい

経文は奴らによって再読され

安心して繰り返されるご挨拶！

(続・二) 失題、即ち闘争マシーン漂流記

金山 大地

14:11	重要であろうとなかろうと情報は、
14:30	怪獣や怪獣や唐変木の、 恐れ多くも、 滑稽な、 影、 に泳ぐ。
14:34	冷たい液晶に。
14:39	書け / 賭け ない。
16:12	謳う(べき) ※(言葉/目)。
16:37	「物語は、 拒否せねばならない」 ので、 「オニ」(＝鬼)、 がヤマト言葉でないことの苦しみ、
17:03	を考え続ける髪の毛 が、 爪 を切るのを忘れ、 切られる爪 を、 忘れた髪の毛 ……。
21:33	それは、 見知らぬ。 点から線へ、 憎しみを、 人から風へ、 伝える。
22:48	貫、 世界——童貞。
22:23	触れ / 狂れ ない。
23:26	他人事ではないと感じ、 バス停まで駆け出そうと考えたが、 風は強く雨は激しく、 人と人の仄暗いあいだ 隠れた売れ筋の、 商品がある、 と、 テレビ・ニュースが、 そう伝えた、 気がする。
23:45	23:45
25:50	25:50
24:06	24:06
24:39	24:39
26:02	26:02

(誤訳の……ラファティ / 国境の……切れ端) 。

火曜日、は、

- 19:32 有力資本のように、
跋扈したいのに、
19:44 喉が痛いのに、
19:49 そんな世界の名著、
知らない、
知る由もない、
と、
22:19 心臓の無力に怯え、
叫ぶ、
22:25 というのは質の悪い小説だ。
-

木曜、日、

01:44 ファックについて考える。

01:53 ……’

01:55 ……’

……’

……’

……’

01:59 ファックについて考えるのをやめる。

あー、金曜日、

- 24:15 その夢について言及したい。
- 24:38 その夢についてばかり言及ばかりしたい、
と言う。
- 24:42 (耳は靡き)。
例えば昨晚、
煌めく階段をとでもスノッピーに上昇しまた下降したという。
- 25:03 余計な手脚を嘲笑い、
自分の眼を他人の眼のように弄んだという。
- 25:21 犬の糞を踏んだことがないのは、
きつと特筆に値する史実なのだろうと思いつたという。
- 25:29 またあるいは、
友人であったかも知れない人物が、
大手コンビニエンス・ストアの駐車場の、
自らの血の海で遂に溺死したことを、
窓のない御便所で知らされ、
さしたる感慨もなく。
- 25:56 やらはみささぶしぞめはへみろちるわきとつ。
25:59 (不意に、
右傾化する蓋微)。
- 26:09 敵、
は麗し。
- 敵、
が麗し。
- 26:20 眠ってはならないから、
それは確かなことだから、
26:28 千羽の鶴が炸裂するように炸裂したいから。
- 26:49 言の葉は、
ダイ・トリッパー。
- 26:51 雨が降って来たか。
- 26:55 都市を雨と、
射殺する。

ノウのみち

金子 鉄夫

罅、中心から

ひだひだ、ひだ走って

ニク折れてしのび

やわあわああ

やわあわああ

あるくノウっ、

ノウのみちは

わずかにふるさとの悪臭

蛇腹にじりよって

泥まみれの名詞の方へ身をよじれって

熱すれば無頼に落ちる

ダロウヨっ、ダロウヨっ

つむじとじて

目から丁寧に捨てて

千枚のペロが

曼荼羅しわくちやノイズ語り

ノウっ、

ノウのみち

足先から(豚)になつて

(そう、あなたの

(みにくい(豚)になりたい

入れた？入れてない？

のあわい

けむりたつ、くだらないねえ

ハハの顔から剥がしてゆくドラマ

絡む脆い管を断絶すれば

ばっああああと

ばっああああとひらくかもしれないぜ
愛されない石吐いて

塩焼けてくる人面

あるくノウっ、

ノウのみち

虹色の遺体は頸がまわらない

と奥歯、噛んでじゅうるじゅる

(もう一度、ひとめに曝されるまえに

(もう一度、死んじやえよ

やわあわああ

やわあわああ

やっぱり一本の螺子

としては生きてゆけないみたいだ

ひからびた文字の向こう側で

手まねいているあいつは九歳のぼくで

(全身漂白)

かゆそう、かゆそうだなあ

やわあわああ

やわあわああ

生育している骨に食らいついてあるくノウっ、

ノウのみち

だあれもだあれもないはずなのに

いやあな体臭はただよって

汚い水だけが後をつけてくる

やぶりやぶいてあらわにしてしまえっ

やわあわああ

やわあわああ

足先から(豚)になって(豚)

(そう、あなたのすべての穴と穴

(ふさいで鳴きたいほくです

やつ、わあ

わああ、わあ

なんとなくやっっちゃうからな

鈴木一平

美しく釣りをしている人を見て
おれだなあつて思った

まあ、そのために海来たようなもんだしね
ぐらいの気持ちがあるにしろ

打ち上げだけ行こうとして

なんとなく帰りに

近いつていうのはすごい

よくわかるような気がするだろ？

土下座する前に踏み込むところが

日に当たると悪くなることがあるので

心配だったし、来週

見たらあれだと思つて薬局

つて茹でるとアク出てくるから

昔近所に住んでた店も

見つけたら教えてくれとか言われたけど、

お前だろつて言つたら

明日会うみたいな話になつた

君のことは何て呼べばいい？

たとえば電柱が犬も歩けば

小鳥とか撃つている道が

よく分からないせいか

首から下げている、匂いで

分かるみたいなどこあるし、

言葉づらだけで捉えたら

裏返して着ていたのかもしれない

山の上でもいい。遠目から見たら

たつぷりとした広い坂道に、ひとりの人物が
掘っているとたまに出てくるのだが、

基本的におれの土地だから

広げてみると案外広がったこと

今住んでいるのとは違う場所に住んで

頑張ってる私だからバチなんて当たらないよね？

その手腕を発揮するのである。

それにね、彼とは理想としての将来像が

歩いた道と書かれた地図には

そこらへんも歩いてると思うし

あまり見ない顔だったので

動物の肉を食べること、野菜の

肉を食べ、それから野菜の

目的地は色々あるという以上

本当は私なんかじゃないってことなのかな

間もなく明日には

来年になるということを知っている。

楽しい人

鈴木 一平

こんにちは。楽しい人になりたかった。だいぶ早い時間に来てしまった。雨が降っている。夜にはきつと雪に変わり、信じてくれたことだけを二度と言わないでほしいと誰かが本当にそう言ったのか、普通のことではない。とりあえず今のところは以上のことについて気がかりか、それ以上とも思うのですが、歩いてくるのがぼくで、そうでないのがもしかしたら、本当は昨日のことなのかもしれません。いや浮いてて、よくそんなとこまであるよなあとか言ってるうちに私の出番になって、上から順に読み上げる作業の下に座って待っていると言われたので、石を並べているのが私から最初にやっているのだと答える限りでは、たぶん来週中の話かと思われる。今週はまず自動車、次に自転車、それから次は徒歩と変わって、今度は四つん這いで走っている犬に乗り移っていくうちに、飼われていたことが後ろにいたら見えづらく、困っています。まあ、この分だと犬の次は虫かなあ。ルー尔的には倍数が似ていたから、互いに似ているものや限りなく同じだと思うものを、全て同一の平面に置きなさい。居間に入ると父も向こうのドアから入ってきて、昔私の住んでいた地域のお祭りでは子供が衣装に身を包み踊り、彼女が笛を吹くことになっていて、そうだな、もうすぐ私も大人になることだし、あれ以上もつと大きくならなければいけない、ならなければいけないのだと、自分に言い聞かせていたのは誰だったんだろう？「ああ、そうだ思い出した」「何のこと？」歳をとってしまったんだ。枝の先にできたたくさんの蕾が花になっていく過程。でも、それだつて見栄えが良くないとできない仕事なんだよ。「たしかに？」そうかもしれない。私、うれしい。ぼくは今よりもずっと小さかった笛を吹いている写真を見せてくれたし、その手に自分がついさつきまでしていた時計にもできないことだつてあるんだから仕方がないよね。まあ、きちんとしたことはこれからゆつくりと覚えているのは、目が笑っていなかったから飲み込みが早いと思う。

まず足を持って、

うん。

名前だけでも。

それから台所で野菜を切っているあれはなんだろう

私のこと？

おれの話だけどね。でも、この前のあれはすごかったね。白い紙をわたされて、その上で
きるだけ大きな絵を描いている先生がいて、生徒がいて、授業を受けている教室が今日は予
報通り1日中雲に隠れていたこともあったせいかととても寒く、私は暖房を付けた方がいいん
んじゃないかなあって思ったから、私は暖房をつけなさい。暖房は、いつもならスイッチを
押せばすぐに入ったのだが、今日に限って閉まっていたせいで、開けてみたらそうなのは
ないでしょうか？」と分かった。彼は難しく考えすぎているのかもしれないね。ぼくはそう
いう時はいつも、長い机を使っていた頃は掃除が大変だったとよく聞いたものだったし、春
までにはまだ少し時間があるにも関わらず、こんなふうにいるのままだに土地を広げていくこ
とだってできる。花が咲いていた。

具体的に言うのと、このへんはいつも暗くなる頃にはそれはそのままでも動いているものを写
真にすることで、過程でもないし、たぶん結果でもないものが心からもつといいのにと私が
答えると、ぼくは言われた通りの場所を歩いている。これはたぶん、あの人に私なんじゃな
いかと聞かれることを踏まえてからいつもすることであり、やつぱりちゃんと印を付けてお
いた方がよかつたのかもしれないし、方法はある。

座っている人を見ている。たしかに触ってみると表面は案外やわらかい音が立て続けに聞こ
えたので、私も思わずその音のした方向を振り返ると、これまで歩いてきた道であることは、
たしかに間違いないはずだというのに

彼女は果たして何でもかんでもそれを口にするその人じしんの性格の話？ どちらかと言う
と明るい人がタイプですね。要するに、それを順々に書き連ねていく身体は言うことを聞かず、
聞く耳も持たず、ドアへ向かって歩きつつ、足元に何かものが落ちてないか注意しないと
すぐ証拠とかいうのって悪い癖だと思う。

起きている。

呼んでいる？

そうでないものとの関係みたいな話でしょ？

裏返す。

たぶん、それが人にとっていちばん大事なことなんだと思うけどね。

瞬間的に理解したのである。

私たちはきつと出会うために生まれたのね、急に動いたのを聞いてとても驚いた表情を見せ
たのを、べつにそういうの初めてって訳でもないし、それでも「似たような言葉を並べてい

くぼくをそんなふうに思い出すこともあり、今になって本当にこれでよかつたんでしょうか？
私はいつもカバンの中からちよつとした思い違いをするたびに、こんなふうと同じ表情を
読み取るのだった。そのせいで、果たして答えになっていないんじゃないかという感じがずつ
と彼の口元に苦い後味を残したコーヒー。それでもう何杯目だろう。外はまだ雨が降っていて、
私はそれをきちんと理解するまでにとても長い時間を様々なことに費やしていく。昨日もし
ばらくして時計を見ると、だいぶ早い時間に来てしまったし、それなら代わりに何か楽しい
人になりたかった。こんにちは。さみしい人。眠る前に電気を消してくれた。ぼくは楽しい
人があるのだという。身体の話かと思っていた。大きい人だと思う。

短

歌

た

ん

か

おせっかいな雨に対して不満も少くない地べたたち

飯塚 距離

人の顔は倉庫に似ている、と思いはじめてからの地球は有名なものの体重が減らない見渡しにいます。鼻水が私で止まらなくなったのもその頃からで、顔を横に振ると鼻息は人知を去った！という認識の延長で、「デコイの水鳥」を一日の斜面へ完投したつもりになっていたので。

春あさく群れ浴びはじめむ催馬樂がシャワーよりふたつみつつの苦戦

港。

または湾にもれなきかさぶたの神経衰弱めぐりあつてる

煙突の霊を口寄せする位置につきたいらしき

気持ち一つで時を追う、

ミンチ

——ほどろんどろんろん おしなべて ろどん

——ほどろんどろんろん しきなべて ろどん

「例年わが地方ではこころばかりの、そのぼかぎりの扉、とれます」

風力のような視力でなきそうな泡立草に注意がいった

「妻にも妻はいまして似ています顔が灯のない対向車線の夜に」

どれだけ京浜東北線酸っぱく言い継ぐとこの目路の青笹

「かたちあるものにひかれておかあさん牛はこなぐすりになりました」

西風に魔除けちかければ紐とかれ出す逸話さ 嘯みしめたまえ

「身体の東西だとはつゆおもえなくて拍手を大変にやる！」

幻の面子潰すは沌馬、屁馬、衰馬 手の平にはかゆみ止め

「霧臭キワレニモ帰ル納屋ハアリイマ紛レナキワレラハココロ」

立てこもる？それもいいよね老朽化したくちびるを一軒借りて

(そうだなあ。たとえばそこは……)

の て 畑 蠶、螂、) 願、一、杯、)

属 腕 ち か 赤、酸、漿、)

専 章 お な。嘴、) 便、追、)

(まあ家賃には光を払えつつーのが海の向こー式らしいけど……)

(だから、ここにもいられないんだ)

いられん畑を出、そこ行くや、袖挽ぎ取られ、幾粒もたたたらを外し、

走っていた私、

走っていないかった私、

ぶつけ合いたかったおでこが、野で、こう、野で、こう、さ。

火事という生地から切れた火のテープ巻く大事に膝に目隠しのように

た だ 突 っ 立 っ て る だ け な ん で だ れ が 言 え る ん だ 愛 画 で 靴 は 焼 か れ た
黄 花 笑 燃 鞋

道路道路各位各位のセレモニー・や・ぶ・へ・び・は・や・く・な・い

さつき散った答えがもう笑った！ さつきあゆんだ三足歩行の雲に

カトラリー配る空すら知るきみの腑に腑に腑に腑に誕生日、無く

私が戻つてくると、雨がふりだした。

「一つ目のホムズという人物はいない。ホムズに食い入る人々の

度合いだけがあるのだ」、今は雨のきみね、知つてゐかい

全島函内にある半島函の王子が壊した戦車を帽子だと（執拗に）振り、

すぐ心で振り返ると、あつ—五— 本揃つたら確かに麻葉だ

よ、— 製つ、製つ、製製するぜとゆめで鳥居が発光（したいの）

—【出口】って地名が近所にあつて。— それを知らず見ていた星。

前提に愛が無いから— 庭掃除、— けど庭も黙るたび逃げてしまふ

— 十つ目の解決も無いのか— どうか、—

十つ目の人相も無いなら、— 。。。。— でも、ゴンドラは、—

。。。。鈴焼。。。。鈴焼 鈴を小コペであたためてる傾命ちゃん

東屋を抜け出し、天候みたいに回りながら怯えながら、—

。。。。鈴焼。。。。鈴焼

おやすみをけつしてしたとない傾命ちゃん頭の雲を啄ばむ。—

雨がやんで。

窓をあける。

窓をしめる。

窓をあける。

はるかなれないきみに一台貸したげる血相から雲泥のこぼれて

骨カイブツ

ほ

ね

か

い

ぶ

つ

真野さよ『枯草の手袋』より

岩尾忍

手袋をあんであげると
約束は萎れないけれど

この国には

ダリアの花束のような毛糸がないので

蓬の茎をほして
編棒をつくったけれど

野茨の蔓は

かさかさとして、すぐきれてしまう

昼は小鳥にきき

夜は夢にたずねて

私は枯草で六十六の手袋をあんだけれど

この村には郵便局がないので

郵便局はあっても

私がおまえのあて名を忘れてしまったので

聖夜の鐘をききながら

私がおまえに贈らない

八十八の、枯草の手袋

あまり知られていない詩人で、影響を受けた人を、ときいた時、すぐに思ったのがこの人のことだった。真野さよ。だがこの人は「詩人」としては、あまり、どころかほぼ全く知られていないだろう。私自身、この人のいわゆる「詩」の作品として読んだことがあるのは、

今引いたこの一篇だけなのだ。真野さよが一九五八年に出版した小説『枯草の手袋』の序詩である。

しかしこの人を「詩人」として私が記憶しているのは、経歴に「戦後、詩作をはじめ、河井醉茗の塔影社に入る。五二年に詩集『葡萄祭』発表」と記されていたからだけではない。この『枯草の手袋』という作品が、一人の詩を書く者を主人公としていているからである。主人公の名は「くみ」。「平和で模範的な家庭」で善良な夫とすでに十数年暮らし、二人の幼い子どももいる主婦だが、ある時旅先で年下の青年と出会い、やがてそれまでの家庭を捨ててその青年と暮らすことを選ぶ。こう書く恋愛小説であり、たしかに恋愛小説ではあるのだが、その底にはくみと「詩」の、女と「書くこと」の出会いという主題が響き続けている。

まだ戦後間もない日本を舞台として、それは現在の私の目に、必ずしも明るいばかりの光景ではない。偶然出会ったくみに激しい情熱を傾ける青年は、「きみのなかで一番好きなのは、なんといつても詩人としてのきみだ」と言う。そしてくみの「最も熱心な読者」として「ぼくのところへおいで。ぼくのところで好きだけ書けばいい」と言う。夫の家にいても、くみは詩を書けないわけではない。優しい夫は、詩集を作るなら金を出してやる、とさえ言う。だが青年のそのささやきにくみが引き寄せられる心理は、私にもよくわかる。夫との形式的な関係の中にはない、内面の接触、「読まれる」悦びがそこにはあるからだ。それはそれでいい。しかしこの青年は一方で、新たにくみを所有しようとする者でもある。家を出たくみはたしかに時間の余裕や詩作への励ましを得るが、それはあくまでも新しい夫の手で、その手の中で与えられるものだ。そしてくみ自身にはそんなことよりも、子どもとの別れという犠牲が強いられる。私はここに時代を感じるのだが、この小説で、くみは全く当然のこととして子どもを置いて家を出る。子どもを連れて、という選択肢は夢想すらされない。前夫にも家財にも執着はなくても、子どもたちへのくみの情愛は強い。子どもを「私の肉のつづき」「私の部分」とためらいなく語る母親なのだ。その子どもたちを捨てて、くみは作中で数え切れないほど泣く。手袋をあんであげる、と約束した小学生の娘を裏切って私は家を出てきた……それが、冒頭の詩の背景だ。

真野さよは小説家としても寡作で、私はこの『枯草の手袋』と『黄昏記』（一九八一）しか読んだことがない。しかしどちらも私にとって忘れられない作品だ。『枯草の手袋』で女性と母性との葛藤を、『黄昏記』で老いの、具体的には今でいう認知症の問題を扱った真野さよの作品には、小説としての紛れもない美しさ、面白さに加えて、時代を少しずつ先取りした鋭さがある。『枯草の手袋』のくみがそうであるように、真野さよの描く人物は時代の制約を超えない。少なくとも意識的には。くみの選択はたしかに、小鳥が一つの籠から別の籠へ飛び

込んでゆくようなものとして今の目に映る。だが面白いのは、その制約の中で手探るような選択を行う人物の姿に、何か、すべての時代を軽々と超えそうなものがあるのだ。くみについて言うなら、この人はその新しい籠からもやがて飛び出してゆくだろう、と予感させる何かがある。そういう生身の人間の、矛盾にみちた存在が宿す力、それを確実に写しとる真野さよの文章が、私は好きである。

そして最後に、この人の詩集『葡萄祭』の所在をどなたかご存じありませんか、と書いておきたい。図書館や古書店の目録にも見当たらず、私にとって『葡萄祭』はずっと幻の詩集だ。真野さよの言葉の魅力は二冊の小説でもう知っているが、『葡萄祭』にはくみが、また作者自身が出会った「詩」の原型、裸の姿があるだろう。それを読みたい、と思いつけている。

平戸廉吉の機械の動物

山田亮太

これまでの二十九年の生涯において、特異な仕方でお出合った何冊かの詩集がある。『平戸廉吉詩集』もその一つだ。

きっかけは「骨おりダンス」編集部からの依頼だった。「誰も知らない詩人を紹介してほしい」と言われた。何を言っているんだこの人は。「誰も知らない詩人」なんて、私も知らない。当然だろう。注文の意図をよくよく問いただせば、「近年読まれたり論じられたりする機会の少ない、おまえが好きな詩人について書け」ということらしい。いくつかの名前が頭に浮かんだ。けれどもその時点で私にとつて気がかりなのは「誰も知らない詩人」だった。誰も知らない詩人？ そんなものは存在しない。当たり前だ。それならばせめて「私の知らない詩人」に出会いたいと思った。

新潮社版「日本詩人全集全34巻」の32巻目『明治・大正詩集』と題された一冊を手にとった。独立した一巻を設けるほどではない、比較的マイナーな詩人の作品を多数収録した巻である。この中にはきつと私の知らない詩人もいるだろうと思った。平戸廉吉という、どこかで聞いたようなないような名前を目にした。経歴を見ると、日本国内のモダニズム詩の端緒を開いた人物であるようだ。イタリアでマリネッティが一九〇九年に発表した「未来派宣言」から十数年後、一九二一年に「日本未来派宣言運動」を発表したという。廉吉は一八九三年に生まれ、一九二二年に二十九歳で亡くなっている。肺を患っていたそうだ。私も最近肺炎にかかり、いつまでも治らずに咳ばかりしている。私も二十九歳だ。そうした個人的事情もあって、廉吉に親近感をもった。

廉吉の唯一の詩集『平戸廉吉詩集』は死後九年たった一九三一年、有志らの手によって出版された。さらに五十年後の一九八一年、日本近代文学館が当時の装いを再現した形で複製した。そしてさらにその三十年後、私は古書店から複製版『平戸廉吉詩集』を取り寄せた。新品同様のその本の、まだ切られていない小口をカッターナイフで裂いて開いた。

機械

苛立たしい電気の動物

冷静な頭の動物

動き出したら

何時まで動くか分らない

動き出したら

何処まで行くか分らない

黙りこんだら

何時まで黙るのか

黙りこんだら

何処まで深く沈むのか

私は機械が好きだ

私はこの詩が特に好きだ。稚拙かつ素朴な詩である。なんだかこどもが書いたような詩だと思つて初読の際は笑つてしまった。廉吉が書いたもののうちの最良の詩とは決して言えないが、当時まだ新しく希望に満ちた存在だったであろう〈機械〉に対する実直な眼差しが表れていて微笑ましい。そうか、機械とは「電気の動物」であり「冷静な頭の動物」だったのだ。〈機械〉や〈動物〉といったモチーフは、他の廉吉の詩にもしばしばそしてより過激な形で登場する。例えば次のように。

鉄砲の音を聞け、

鹵車、調帯

咆吼する汽罐

釣牙を鳴らして走る影

彼女等の飾れる鬘。

見よ、

猛き野獸

都市の中に格闘し蠢動する猛獸の群。

(「斑点、釣牙、鬘、触角、蹄」)

さきほどの詩とは一転、ここでの機械は都市の中をうごめく猛獸の群れとして描かれている。さっきのが飼い主の言うことをきかない猫だとしたら、こっちは動物園から逃げ出した虎だ。猫はかわいい。虎は恐い。でもかっこいい。

虎のような不気味な文字が出てくる詩もある。

正午——一本の長いキヤナル無数の幾何学的な掘割無数の白鳥の群、羽搏きわめき尾を振る——看護婦は負傷者を運びバルコンに寝台車を回転する——饒舌——滑走——旋回——パタパタパタパタ——PATA——PA——TA——TATATAAAAAA……………患者の杖ステッキとなり横眼に検温器を振る——兵糧車が通る、満載された弁当、鈍い孤線の轍ワダ＋ミルクアイスクリーム果実＋売店の賑ひ＋食堂を通過する雑音＋窓窓の顔＋苦悩の息＋は號——番に號——番ほ號——番面会者＋ドクトル＋殺菌剤の嵐〓生と死の戦ひ〓生きんとする努力！

屋外を通る電車自動車モータサイクル荷車——躁音は火花を切つて浸入し命中し爆発し散乱し粉碎する

（「K病院の印象」）

タイトルからこの詩がある病院の印象を表したものであると伺いしれる。しかしいったいなんなのだろうこの混乱した記述は。病院内の事物や事象は相互の関係が不明なまま次々に羅列され、「十」記号が登場したかと思うと、「生と死の戦ひ」だの「生きんとする努力！」だのといった結論が引き出される。すさまじい展開だ。なぜこんなことになったのか。それは、病院の外を電車や自動車が行っているからにちがいない。電車も自動車もとても速い動物だ。その早い動物に乗って人間は移動することができる。信じられないくらい速さだ。このようにして廉吉の時空は歪んだ。時空の歪んだ眼で病院内を見た時、そこにあるものはとてつもない速度で移動し結合し、生命の輝きを放つ。

自動車に代表される速度の美とは、いうまでもなくマリネッティの未来派に由来する。こんなことを言うと廉吉は嫌がるかもしれないが、廉吉の試みの多くはマリネッティやその他西洋の詩の模倣以上のものではなかったのではないかという思いは拭いきれない。『平戸廉吉詩集』には詩のほかにくつかの散文もおさめられている。それらにおいて、廉吉は自らとマリネッティとの違いを主張し、アナロジスムという独自の概念を提唱しているが、それとてどれほど成功しているかは疑わしい。とはいえ、廉吉が西洋の文学の動向をいち早く察知し取り込むことで自らの世界の見方を刷新していったことはまぎれもない事実であろう。その姿は私にとって愛おしく、そしてまた参照すべき外部があつたことを羨ましくも思う。

最後にもう一篇、廉吉が自動車について書いた愉快な詩を紹介したい。

車

渦巻く 渦巻く

戦の音が――

私の車が

舞ふ 舞ふ 舞ふ

t t t t t t t t t t t

d d d d d d d d d d d

p p p p p p p p p p p

r r r r r r r r r r r

彼方に 彼方に

カポカポカポカポカポ

トテトテトテトテテ

近く 近く 近く

舞う 舞う 舞う

激しく 激しく

私の心棒に懸つて

何物か

全世界が

凡てが 凡てが

車輪が

暗黒に舞ふ

t t t t t t t t t t

d d d d d d d d d d

p p p p p p p p p p

r r r r r r r r r r

※引用はすべて『平戸廉吉詩集』（刊行・日本近代文学館）に依った。ただし旧字は適宜新字に改めた。

編集後記

ここ1カ月の間粉物以外のものを食べた記憶がない。朝と昼はパンかクッキーを食べる。夕食はうどんかラーメンかつけ麺か油そばを食べる。べていて、さいきん家の近くに蕎麦屋ができたので、その野菜つけ蕎麦をローテーションに加えるといつか全身が粉物になるのだと思う。人間の細胞はだいたい6〜7年周期で昔あった身体を捨ててしまうらしいから、この食生活を6年くらい続ければぼくの身体はすべて粉物になってしまう。骨おりダンスの方は、骨おりダンスはやつとその6分の1を通過したところなのだ。どうなんかなと思う。骨おりダンスが創刊されてから今日までの間で、と言ってもぼくが参加したのは4号と5号の間くらいだから大して長いこと関わってるわけではないし、ぼくの身体が粉物になるまでの6分の1の間というのは人間の一生に換算するのと同じくらい短いような気がするのに、それでもその短い時間感に実にはたたくさんのものが目の前に現れ、過ぎていくまで過程とは別の次元でいくらか変わったようになってくることが過ぎていくだろう。そしてそれはどのようにも思えていき、ぼくを変えていくのだろう。それだけで多量減入りそうにもなるんだけど、それでもできればその1つ1つをできるだけ精緻に見つめていきたいと思う。今日の夕食は蕎麦にしようと思う。(S)

冬が到来するたび、アゴの右辺部分が耐えられないくらいに痛む。毎年、神経科に行つて原因を突き止めようとするのだが、ずつとレントゲンにさえ、その微を見せない謎の痛みである。真夜中、急に、この得体のしない痛みを眼に目覚まし、鎮痛剤を投与しはするが効力はない。底知れない闇のなかで、独り、この痛みを耐えていると、あまりの痛みでクラクラ、すべての感覚が麻痺するように覚束なくなると、この麻痺が絶頂に達すれば身体が解体されるような、闇のなかにすべてぶちまけられ、解体されるような錯覚に陥る、その一瞬、名づけえぬ、その一瞬、闇と僕との交流の最中で、僕は確信する、この痛みは得体の知れない痛みは、生まれ出る以前からの宿命的な痛みだと。そう、やはり生き抜くことは痛み続けること。しかしである、その痛みの彼方に、一瞬の恍惚がある。それが「詩」というものだ……と柄にもなく、くだらない戯言を吐いてしまったが（こんなテキストウを示唆したのは、きつと昨夜のふざけながら戯れたバタイユのせいである）、僕はそんなものが吐いてしまったが結局、この戯言の絶え間ないリトルネロ、決した「詩」だともつてはいないし、こんな痛みの彼方に「詩」があるなんて、詩人というのとはどれだけ被虐体質なんだ……とまたくだらない戯言を吐いてしまったが結局、この戯言の絶え間ないリトルネロ、決した「詩」の姿勢だともつて、得てして真理など踏みこたしてしまつて、聖域のなかでさえ涎を垂らして戯言を吐き続ける。これが正しい「う勢」なのだとおもう。全体的なものまで含意した「うた」の姿

この「骨おりダンス」も今号で1周年らしい。よくも、まあ、こんな心細い方針で、1年間やってこれたと感慨が深い。これも執筆してくださった人達、いつもカッコいいデザインをしてくれる三澤さん、鈴木くん、吉田くん、萩野くんのおかげである。あれがとうござります。様々な出来事を通過したような、してないような足元が定まらないうちで、これからは「骨おりダンス」が続いていくようなら、もつと、もつとズレていけたらいいなんておもう。ランボーではないが、ダンスつ、ダンスつ、ダンスつ、でまあ、夢中で踊り続けたさき、僕もあなたも、どっちがどっちになつて溶け合つた、決して「理解」などとヤボなことは口にせず、そのポイントの、そのまたさきまで解体的に交流してゆけたら夢のようだ。

日々はされど偽りだから、昨日の遺体に唾吐いていけ。

詩誌 骨おりダンスっ vol.07

編集長：鈴木 一平

編集委員：金子 鉄夫 + 萩野 亮 + 吉田 恭大

デザイン：三澤 水希

連絡先：csnxd268@ybb.ne.jp (鈴木)

発行日：2011年2月10日

撮影場所：高田馬場

撮影：吉田 恭大

次号：5月中旬発行予定